

(K. レーヴィット) になったばかりでなく、リルケやトーマス・マンにおける影響からも察せられるように、「魂の小規模営業芸術を超克するための救援者」(der Helfer zur Überwindung der seelischen Kleingewerbekunst)⁵⁷⁾ として、ドイツ文学史上に確固とした位置を占めているのである。

ニーチェはいまだ19世紀の実証主義が全盛のときに、「価値評価に参画する〈主観〉の問題」⁵⁸⁾を呈示し、〈創造的な自我〉の領分を強く擁立した。ニーチェの説く、この〈自我〉や〈生〉の問題は、あるときは創造と変革を求める *aktivistisch* (行動主義的) な側面が強く表面化し、またあるときは実存の深層へ下降していく *voluntarisch* (主意的) な側面が顕在化している。概して、表現主義の抒情詩には、抽象的な詩的形象 (たとえば *Himmel* とか *Stern* と言った宇宙的な言葉や、*Angst*, *Sehnsucht* と言った抽象名詞など) が多く用いられたが、それら外界との対決の用意の少ない世界感情の吐露は、確かにニーチェの詩的形象に沿った部分が多いとしても、そのような現実世界から遠い詩的世界と先に述べた行動主義的な側面からのニーチェ受容とが不用意に重なり合うとき、ニーチェという存在の実体は遙かにかなたへと霞んでゆく。表現主義の芸術家のなかにもニーチェのある一面のみを捕捉して自悦し、いわば陶醉的にニーチェに師事した、多くのいわゆるニーチェ・エピゴーネンたちのいたことも決して度外視してはなるまい。

57) 文芸雑誌 „Das literarische Echo“ (1918) にみられる Frantz Clement の言葉 (17)の上掲書, S. 182).

58) Elrud Kunne-Ibsch: Die Stellung Nietzsches in der Entwicklung der modernen Literaturwissenschaft, Max Niemeyer 1972, S. 33.

に対して詩人たちは、monologisch に切り詰められた極限の声を刻印していった。

1920年に出版された Kurt Pinthus 編の表現主義抒情詩アンソロジー『人類の薄明』(Menschheitsdämmerung) は、表現主義文学の集大成のひとつとして意義深いものだが、その序文に Pinthus は、当時の雰囲気を一高きトーンで次のように伝えている。「世界の詩歌の歴史のなかで、ひとつの時代の叫喚と没落と憧憬とが(中略)、これほどに高らかに、引き裂くように、揺さぶるように鳴り響いたことはかつてなかった。彼らの心臓は、アーモルとかエーロスとかのロマンティックな矢によってではなく、呪われた青春、憎むべき社会、強いられた殺人時代の責苦に貫かれたものであった」⁵⁴⁾。

表現主義の文学には、たとえば Hasenclever や Bronnen, Sorge などにみられるように、たびたび「父親殺し」や「司祭殺し」のテーマがあらわれる。旧い録板を葬り去ること、「既存のものを打ち破る意志」(der Wille zum Bruch mit dem Bestehenden)⁵⁵⁾は、表現主義芸術一般のきわだった特徴のひとつである。A. Arnold は表現主義芸術の根幹にあるものを「新しい人間像を求めての手探し」(die Suche nach den neuen Menschen) だとして、たとえばマリネッティの Flugzeugmensch やデーブリーンの Gigant, ショーの Langleber などにその原型をみようとしているが、それらの原点には、いやおうなくニーチェの“Übermensch”がある。時代を覆うニヒリズムの超克に意を燃やしたニーチェの情念は、はからずも20世紀初頭の文学者たちにとって格好のともづなになったと考えられる。

表現主義の文学者たちは、ヤコービーやフィヒテには殆んど手を触れないままであったが、ニーチェ、ダーウィン、フロイト、マルクスについては、誰もが手を染めたと言われる。ニーチェと同じく非合理主義の論理を説いた H. ベルグソンの「^{エラン・ヴィタール}生の飛躍」の哲学や、G. ソレルの『暴力論』などに比べて、ニーチェは比較にならないほど大きな反響を得ていた、という指摘もある⁵⁶⁾。ダーウィンの説によって、人間がもはや Endprodukt でないことが確証されたいま、「新しい人間」を希求する内面の声に対して、つまり表現主義文学の趨勢に対して、「時代の大きいなるアンティテーゼ」ニーチェは、多くの決定的示唆を提供した。当時の文学者たちにとってニーチェは、「無類の精神的なはずみ」

54) Neu hrsg. von Kurt Pinthus: Menschheitsdämmerung—Ein Dokument des Expressionismus, —Rowohlt 1959.

55) 23)の上掲書, S. 7.

56) 8)の上掲書, S. 21.

とり自分の声が合唱となって響きわたるとは予想だにできなかった」⁵²⁾。ところが、時代の変わり目を敏感に感じとった彼らの声は期せずして一定の方向性を持つにいたる。

殊にドイツにあっては、近代資本主義の渦中に遅れて組み入れられたことも原因して、揺れ動く現実に対する焦燥感・危機感はそれだけ深刻なものがあり、各地で芸術家グループによる芸術革新の活動が（のちには次第に社会変革運動の傾向をおびてくる）、一段と活況を呈する。その名も時代の激動を示唆するような、表現主義の代表的な文芸雑誌“Der Sturm”（嵐），“Die Aktion”（行動）などが続々と創刊されたのが、1910年から数年間にかけてであった。いちやくヨーロッパの中核的な文化都市に成長した大都ベルリンの街には、確かにある種の鬱勃たる文化衝動がうごめいていた。ロンドンではさして衆目を集めるにいたらなかった F. T. マリネッティの未来主義提唱が、1911年を中心にしてベルリンでは大きな反響を呼んだが、それも決して偶然のことではない。“Sturm”の編集主幹 H. ヴェルデンは、早速（1912年）このマリネッティのマニフェスト（このマニフェストの背後にも、見紛うことなくニーチェの姿がある）を独訳掲載して⁵³⁾、表現主義芸術の興隆に一役買った。当時の詩人たちの激越なまでの嘆息やアピールも、裏を返せば、当時における生の不安や、文化の閉塞状況、社会のアナーキーの様相などを如実に反映したものにほかならなかつたであろう。

表現主義と称される芸術・文学一般には、〈神の死〉以後のいまだ知られざる神（人間）を求めてのさまざまな手探りが顕著である。混迷の時局をそのままに反映して、そこには文人・芸術家たちの多様な、しかも深刻な対応の姿が際立っている。変革を求める激しい叫びもあれば、死への共感を深めていく終末観もあり、また「倫理的なものへの壮大な志向」(K. ピントゥス)があるかと思うと、宗教的な次元への一途な沈潜も稀ではない。表現主義者たちに共通した最も大きなメルクマールのひとつは、その種のある本質的なものへと向けられた精神的な緊張であり、一方またそのパトスの表現のためならば「内容すら抹殺する」(B. ベン) という、表現形態の特異性であるだろう。内的に決定的に把握され感知されたものが、すなわち現実として据えられ、その内的現実

52) 40)の上掲書, Bd. II, S.8. 現在われわれが表現主義者と呼んでいる多くの文学者も、本来自らをそれと認めた例はむしろ少なく——Iwan Goll はすすんで表現主義者を自称した数少ない文学者のひとりである——, たとえば G. ハイムや G. トラークルなどは、この概念が自分といかなる関係にあるかも知らぬまま、この世を去った(23)の上掲書, S. 13).

53) Der Sturm. Dritter Jahrg. Nr. 111-112, Berlin 1912.

とはできないと思われる。)

ニーチェとカイザーとの関係を、たとえば Wolfgang Paulsen は否定的な方向から論じているが、翻って考えてみると、カイザーの作品（特に『カレーの市民』など）における修辞法や、その文学にみられる執拗なまでの「生」への追究のテーマなどが、はたしてニーチェの影響を無視して語れるものかどうか、しよせん疑問が残るのである。後年カイザーは、ニューヨークタイムズから求められた「不滅の詩人を12名挙げてください」というアンケートに答えて、次のような回答を寄せたことがあった。「私は不滅の詩人をふたりしか知らない。すなわち、プラトンとニーチェである。もし孤島へ島流しになっても、私はこの2人の本を持っていれば、何ら不足はないだろう」⁴⁹⁾。

ニーチェに影響を受けたと思われる多くの表現主義文学者のうちから、その若干について受容の事実を指摘してきたが、ここで再び、全体的な視野に戻らなければならない。すなわち、ニーチェの存在が彼らによって“epochemachende Erscheinung”（画期的現象）として受けとめられ、ニーチェその人が表現主義芸術の“Stammvater”（鼻祖）と称される、その背景はいかなるものであったか。

4

ニーチェの受容が次第に深化していった時期は、いわば近代の終りと現代の始まりとの端境期に当っており、ニーチェの予言した「一切のものの価値転換」の時代にほかならなかった。世紀末から今世紀の初めにみられる急激な社会の変貌ぶりや、特に第1次大戦（1914—1919）という世界的な危機に直面して、ひとびとは、引き裂かれた感情と思想のもとで苦しく生きることを余儀なくされた。西洋の「没落」⁵⁰⁾が語られ、人類の「黄昏」が歌われて、巷には「絶望の水増し」⁵¹⁾（G. ルカーチ）状態がいたるところに瀰漫していた。人間性の回復が希求され、社会の変革が叫ばれて、個人の「存在」の意識が、ますます先鋭化されていった時代であった。表現主義者K. エートシュミットの証言によれば、当時表現主義の詩人たちは、「新しい人間を求める絶望的な叫びという点で、思わず知らず軌を一にし、ともに共時的に立ちあがった。だが、誰ひ

49) Hrsg. von Walther Huder: Georg Kaiser. Werke, Ullstein 1970-1972, Bd. 4, S.591.

50) O. シュペングラーの『西洋の没落』（全2巻、1918-22）は、第1次大戦直後に公刊され、多大の反響を呼んだ。

51) 『ルカーチ著作集』（白水社）第8巻、菅谷規矩雄訳〈表現主義の「偉大さと没落」〉、p. 299.

にみられる「個我への執着」や英雄的行為、冷笑的な所作などになって結実化している。“entideologisieren”⁴⁵⁾された個々の登場人物たちの「固有のニュアンス」は、それぞれに自己実現を果すことによって、ニーチェの〈超人〉のアレゴリーと化しているようだ。「シュテルンハイムはほぼ20年にわたって繰返し、しかも誰よりもニーチェと渡り合ったと言って過言ではない。もしニーチェの道徳律に対する再三にわたる参看がなかったとしたならば、シュテルンハイムの主だった作品は、恐らくまったく別の様相を呈していたに違いない」⁴⁶⁾ (W. H. Reichert)。ただし、そのシュテルンハイムもナチスの政権掌握後は、トーマス・マンや R. ムージルなどと同様に、判然とニーチェ拒否の姿勢へ身を翻した。ニーチェの思想が直接的に政治の実践と関わり合うとき、それは抜き差しならぬ齟齬と陥穽にはまりこむ。この問題のかかえる含みは小さくないが、ここはそのことを論じる場ではない。

ゲオルク・カイザーが、どの程度にニーチェの思想圏にわが身を置いていたかについては、種々疑問が残るかもしれない。カイザーの場合、「ニーチェの荘重ぶった身振りの印象以上には、ニーチェから何ら感銘を受けてはいなかった」⁴⁷⁾ という見方も、あるいは成り立つであろう。カイザーは確かに、ニーチェの理念的な側面には殆んど目をくれず、ニーチェの言葉をもっぱら aktivistisch (行動主義的) な方向から捉えた。たとえば戯曲『ユダヤの未亡人』(1911) のモットーに掲げられた、「おおわが兄弟たちよ、打ちくだけ、打ちくだけのだ、もろもろの古い録板を！」⁴⁸⁾ という『ツァラトゥストラ』からの引用文は、ほかならぬカイザー自身が抱いている「生への衝動」のダイナミック主義を謳ったものであった。(ところで、一口に「影響」と言い、「受容」と言っても、その意味するところは必ずしも明快ではない。いったい、何をもって「影響」と呼ぶのか。本来ならば、自己のうちに育んできた想念や思考が、多かれ少なかれ他者のうちに見い出された時に初めて、正当な影響関係が成立すると見るべきだろう。然るに、当人が他者のうちに見つけ出したものが、一方的に偏ったものであったり、時にまったくの曲解や誤解であったりすることも当然起りうるわけである。ニーチェの場合には、その思想や概念が多義的な解釈を許容するがゆえに、そのような広義における「影響」もまた決して軽く見過ごすこ

45) Manfred Durzak: Das expressionistische Drama—Carl Sternheim/Georg Kaiser—, Nymphenburger 1978, S. 52.

46) 43)の上掲書, S.352.

47) Wolfgang Paulsen: Georg Kaiser—Die Perspektiven seines Werkes—Max Niemeyer 1960, S. 103.

48) 1)の上掲書, Bd. II, S.449.

『ツァラトゥストラある印象—』(1911), 『アンティクリスト』(1911) などの Nietzsche-Variationen の小品を数多く書き継いだ。結局はしかし, 「偉大なる生をまずもって善とも悪ともまた美とも思わず, ひたすら憂鬱 (schwermütig) だと思ふ」ゾルゲは, 次第にニーチェの思想圏から離脱して, 戯曲『ツァラトゥストラの審判』(1912) において, 自らのニーチェ鎮魂歌を歌うことになった。「ゾルゲの作品群は, ゾルゲがいかにしてニーチェを超えて, 表現主義的な根本思想への道を探し出すか, また同時に, いかにしてそのための詩的・戯曲的形式を創り出していくか, その経緯をはっきりと物語っている」⁴²⁾。H・デンクラーは, ゾルゲ文学の軌跡をそのように捉えている。

カルル・シュテルンハイムが, いつの頃からニーチェの書に接し始めていたかは, 必ずしも明らかではない。少なくとも本格的にニーチェに出逢ったのは, 以下の理由から, ローマ滞在中の1905年のことではないかという推測が可能である⁴³⁾。シュテルンハイムは, 1905年の7月, いったん戯曲『ドン・ファン』を書きあげたが, 11月になってその稿に再び手を入れた。その際, 彼はこの作品に第2部をも書き加えることを思いついて, 翌1906年秋にかけてその執筆を進めた。その『ドン・ファン』第2部には, 第1部で描かれたような恋の憧れに苦しむ主人公の姿が完全に後退し, ドン・ファンはもっぱらフィリップ国王の Gegenspieler (敵役) として, つまり力の英雄として登場する。この創作過程の変更には, 実のところニーチェの「主観的な強さの概念の倫理学」からもたらされた影響の跡を見逃すわけにはゆかない。シュテルンハイムはその後, 出世作『ホーゼ』(1910) のなかでも「力を基盤にした大いなる背徳性の肯定」を独自に作品化した。また, 世紀転換期における精神状況を綴ったふたつの評論〈ベルリンあるいは中庸の世界〉(1920) と〈タッソーあるいは中庸の芸術〉(1921) には, ニーチェ的視野が多分にのぞいており, 現に, シュテルンハイムはそこにおいてニーチェのことを「救済的な力 (die rettende Kraft)」とも, また「精神的なてすり (geistiges Gelände)」⁴⁴⁾ とも呼んだ。

シュテルンハイムは, ニーチェの教説の核心をおもに “jauchzende Lebenslust” (歓呼的な生の喜び) あるいは “brutale Egoismus” (残忍な利己主義) の面から捕捉したが, それらのニーチェ理解は, そのままシュテルンハイム文学

42) Hrsg. von Horst Denkler: Einakter und kleine Dramen des Expressionismus, Reclam 1971, S. 283.

43) Herbert W. Reichert: Nietzsche und Carl Sternheim (in: Nietzsche Studien Bd. I, Walter de Gruyter 1972), S. 348.

44) Hrsg. von Wilhelm Emrich: Carl Sternheim. Gesamtwerk, Luchterhand 1963-1976, Bd. 6, S. 125.

はわれわれの生命に新しい意義を賦与する……」³⁷⁾、と記し、また翌1907年の5月には、「僕の青春の四大英雄——それは、ヘルダーリン、ニーチェ、メレジコフスキー、グラッペの四人である」³⁸⁾と書いて、自らの若い時期におけるニーチェ体験を率直に告白している。その後のゲオルク・ハイムの詩想を彩る「病める人間」や「母なる大地の喪失感」などの文学主題が、いずれにせよ、ニーチェ的認識——たとえば、「大地には肌がある。しかもその肌は病気を患っている。この病患のひとつがたとえば〈人間〉と呼ばれるやつだ」³⁹⁾（『ツァラトゥストラ』）——に根差したものであることは、ひとまず予測されてしかるべきだろう。

初期表現主義戯曲の傑作『乞う人』を書いた夭逝の劇作家 R.J. ゴルゲもまた、短い年月の間に情熱的にニーチェに心酔し、その後意識してその超克を志向した、特異なニーチェ遍歴者のひとりである。ゴルゲは、文学に目覚めた18歳の夏（1910年）初めてニーチェを読んで、その感動を日記にこうしたためた。「僕は、わが人生の支柱を掌中にした。ニーチェの影響だ。僕は（これから先は）、神秘的な夢幻の世界や、希望・軟弱の世界を一切振り払うだろう」⁴⁰⁾。少年の頃から「神の浸透した霊的な宇宙」を夢みていたゴルゲが、突如魅せられたように〈神の死〉の宣告者ニーチェへ傾いていった背景には、ゴルゲがつねに意識の底で求め続けていた「万物を手操っている根源的な意志」を、ニーチェの超人のイメージのうちに発見したからに違いない。「生の侮蔑。僕たちの内外をとりまく転変の法則に対する憎悪。この法則から脱せんとするあらゆる限りの努力。永遠の存在者、不易なもの、天上的なものへの、熱烈な深い憧れ」⁴¹⁾。——ゴルゲは、ある種の自我拡大の欲求と永遠なるものへの鬱窟した憧憬の念に苛まれていたが、そのような時、「創造への意志」、「意志のパス」、「自己超克」、「永遠回帰」といったニーチェの言葉が、ゴルゲにとってどんなに燦然としたものに映ったことか。彼は、「救助の錨に跳びつくごとく」ニーチェの作品を読みふけたと言われる。

その後彼は矢継ぎ早やに、『青年』(1910)、『オデュッセウス』(1911)（副題は〈永遠回帰の予見者：フリードリヒ・ニーチェ〉）、『プロメーテウス』(未完)、

37) Hrsg. von Karl Ludwig Schneider: Georg Heym, Heinrich Ellermann 1960, Bd. 3 Tagebücher Träume Briefe, S. 44.

38) ibid. S. 86.

39) 1)の上掲書, Bd. II, S. 386.

40) Hrsg. von Hans Gerd Rötzer: Reinhard Johannes Sorge, Sämtliche Werke, Glock und Lutz 1962-1967, Bd. I, S. 27.

41) ibid. S. 26-27.

半からニーチェの死の年（1900年）の頃までがその第1期であり、いわばニーチェ発掘の時期とみなすことができる。次いで第2期が、1900年前後から1933年のナチズム政権確立にいたるまでの時期で、ニーチェの影響が深く浸透する時期であり、第3期は、その民族社会主義のあおりで、ニーチェが多分に歪曲されて受け取られた時期、そして第4期が、第2次世界大戦終結以後の、より客観的なニーチェ像が求められているこんにちにおけるニーチェ受容ということになる。

さて表現主義とニーチェとの関係を観察しようとするとき、言うまでもなく、その第2期におけるニーチェ受容に眼を向けなければならない。

3

表現主義の担い手たちの多くは、1870年代（おもに後半）ないしは80年代の生れであり、従って、ニーチェがようやく“Modephilosoph”になりつつあった時期に、彼らはちょうど少年期・青年期を迎えていたことになる。先述のように、1900年頃を境にして、世間のニーチェに対する関心は急速に高まっていき、「つい最近までいまだ知られざる人であったニーチェという人物に関して、何か活字にならない日はないくらい」³³⁾にまでなっていた。むろん、ニーチェはいまだ思想家としてクラシカーの範疇には組み入れられておらず、いわゆる“Schulautor”の埒外に置かれていたのだが、文学仲間や若い知識人層のあいだではすでに、「超人性や不道徳性についての論議が必須課題のひとつ」³⁴⁾として考えられていた。

表現主義の小説家のひとりで、表現主義雑誌“Sturm”を共同編集したアルフレート・デーブリーンは、少年の頃、教室の机の下でそっとニーチェの書物を拵げ、切なくニーチェの息吹に触れていたことを、その自叙伝のなかに綴っている³⁵⁾。彼は、その後1902年から3年にかけて、〈認識としての力への意志〉、〈ニーチェの道徳教説〉と題する興味深いニーチェ小論を二篇書き残した³⁶⁾。

表現主義抒情詩の鬼才ゲオルク・ハイムもまた、ギムナージウムの生徒の頃ニーチェの作品に熱中した。1906年2月の日記にハイムは、「それにもかかわらず、ニーチェの教説は偉大だ。それに刃向かって何と言おうとも、その教説

33) *ibid.* S. 60.

34) 12)の上掲論文, S. 117.

35) *ibid.* S. 117-118.

36) この二篇のニーチェ小論は、17)の上掲書において昨年（1978年）初めて印刷に付され、陽の目を見た。

たが同じ雑誌のなかでも、“Die Grenzboten”や“Deutsche Rundschau”などの保守的な雑誌がニーチェ否定の色を濃くしていたのに対して、“Die Gesellschaft”や“Freie Bühne”(1904年以後は“Die Neue Rundschau”と改題した)などは、どちらかというとなーチェ擁護の側に立つことが多かったようだ。しかし全体として見れば、いまだ自然主義文学が主流を占めていた時期でもあり、むしろニーチェの思想・言論は、世の識者たちをある種の戸惑いへと誘ったことは否めない。“Die Neue Rundschau”の編集者として活躍した W. Bölsche は—1893年—、「ニーチェに関する論議は、足どりのおぼつかない人々にとっては、多分につるつる滑べる氷板のようなものだ。しかも事情に詳しいスケーターでさえ、絶えず足を踏みはずさないように用心せねばならない」³⁰⁾と、すでに早くしてニーチェの多声的^{ポリフォニー}言辭に意を向けている。

1894年、ドイツで最も歴史と内容を誇る Brockhaus 百科辞典が、その第14版において初めて「ニーチェ」の一項を載録し、ニーチェを第一級の文体家、酒神讃歌の新しい詩人として記述した。かつまた、初めてのニーチェ全集刊行がペーター・ガストによって企てられたのが、その同じ1894年³¹⁾のことであり、数年後には(1898年)、フランスでも、メルキュール・ドゥ・フランス社より、仏訳ニーチェ全集が刊行されはじめている。(ニーチェの実妹、エリーザベト・フェルスター・ニーチェの手になるナウマン社—のちクレナー社に引き継がれた—からのニーチェ全集は、1899年に出版が開始された。)

このようにして、この詩人哲学者の新奇な思想標語は、1900年頃にはすでに「尼僧院や辺境のユンカーにさえ知れわたる」までになっていたと言われる。ニーチェの没年頃を境にして、ニーチェへの言及が、とみに増加の一途をたどり始めていることは、Hillebrand の資料集によっても明らかである。Peter Pütz は、ニーチェ受容史のひとつの区切りの時期として具体的に世紀転換期の頃を指摘し、つまりこの頃、それまでの polemisch (論難的) ないしは apologetisch (弁明的) なニーチェ評価の段階を脱して、すでに historisch-kritisch (歴史的・批判的) な評価の時期に差しかかったとみなしている³²⁾。

ところで以上のことも考え合わせながらニーチェの受容史を広く概観するとき、恐らく次の四つの時期に区分することが可能であろう。おもに1880年代後

30) *ibid.* S. 89.

31) なお、Hillebrand によれば、ニーチェの処女公刊である『悲劇の誕生』(1872)が出版されてから、この1894年までの20余年間におけるニーチェの著作の売り上げ部数は、2万4千部弱という。因みに、評判の良い本ならば、当時1年間でこの数倍の売り上げを示したという(17)の上掲書、S. 18)。

32) 13)の上掲書、S. 60-61.

の黄昏』をその発刊の年(1889年)に読み、その印象を後年次のように綴った。「この本は、まるで稲妻のように私の魂を打ちつけた、その簡潔な言語からは、かつてまだどんなドイツの書物からも感じたことがないような、ある種のリズムが私に向って響いてきた。」²⁶⁾ このような受けとめかたは、当時多くのひとびとに共通した印象であったようで、Leo Berg が1889年に書いた、最も初期のころのニーチェ論評のひとつ、『フリードリヒ・ニーチェ研究』(『ドイツ』第9号)においても、おもにオリジナルな文章家としてのニーチェに比重が置かれている。『悲劇の誕生』について Berg は、「何よりの魅力は、とにかくその表現法の美麗さによるもので、思わずプラトンのそれとの比較へ誘われるほどである」²⁷⁾ と記し、『ツァラトゥストラ』については、「この書は、こんにちのごくわずかな文学作品にしか見出せないような、感性の輝きに息づいている」と記した。また『善悪の彼岸』と『道徳の系譜学』について、「まさにアイスクリーム皿のなかの火焰さながらである」と比喩するなど、ニーチェの光彩陸離たる文章にまず目を奪われている点が注目される。ニーチェの思想そのものに対するよりも、むしろニーチェに固有な文体や修辞法により大きな関心が寄せられていることが、ごく初期の段階におけるニーチェ受容の大きな特徴である²⁸⁾。

概して、若いジェネレーションがニーチェを熱心に吸収しようとしたのに対して、旧世代に属する、たとえば Wilhelm Jordan (1819—1904) や Paul Heyse (1830—1914), J.V. Widmann (1842—1911) などは、むしろニーチェ無視ないしはニーチェ排斥への傾きを示した。むしろ世代間における評価の懸隔ばかりではなく、ニーチェ受容の初期の段階では、ニーチェをめぐる Pro と Contra が激しく入り乱れ、ニーチェを拒否する論評も数多く試みられた。たとえば新古典主義の小説家 Paul Ernst (1866—1933) は—1890年—、「活力あふれるニーチェの中心思想は、思考力に乏しい心情家に対して、決定的な影響を及ぼした」、それは「何よりもまず美辞麗句の連なりであり、うんざりするほどのもったいぶった空言にすぎないのだ」²⁹⁾ と述べ、ニーチェに対して痛烈・シニカルな批評を浴びせている。

ニーチェ評価についての議論は、当時おもに文芸雑誌上において戦かわされ

26) 17)の上掲書, S. 272.

27) *ibid.* S. 62.

28) そう言えば、後年ゴットフリート・ベンはニーチェを評して「ニーチェは…ルター以来最大のドイツ語の天才だ」という言葉を漏した (Hrsg. von Dieter Wellershoff: Gottfried Benn. Gesammelte Werke, Bd. 1, S.482).

29) 17)の上掲書, S. 65.

の思想散文詩にわが魂をゆすぶられたし、そのヴァリエーション作品も相当に書きとめられた²²⁾。Armin Arnold は、「ニーチェの『ツァラトゥストラ』叙事詩は、新約聖書と並んで、表現主義の鍵を握る書物 (Schlüsselbücher) の一冊である」²³⁾とも述べている。後年になって注目を浴びることになったこの作品も、しかし、出版当初は決して世間に喧伝されたわけのものではなかった。この書は、第1部から順次第4部まで箇々に出版されたが、その第4部出版の際にはついに刊行してくれる出版社も見つからず、結局、私家版として印刷され、しかもその発行部数たるや、わずかに40部にすぎなかったと伝えられる²⁴⁾。当時、ニーチェがいかに孤独な遠吠えを余儀なくされていたかは、端的にそのような事実からもおよその推察がつかだろう。Hillebrand 編纂の〈ニーチェ受容原典集〉にも当然ながら、この時期における『ツァラトゥストラ』反響の文章は一篇も載録されていない。

ニーチェ健在の最後の年である1888年の4月、コペンハーゲン大学の文学史家 Georg Brandes 教授は、〈ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェについて〉という講義を手懸けて、当時まだ学界から異端者扱いされていたニーチェを、初めて学問的な場に持ち出す機会をつくった。トリノに滞在中のニーチェは、そのことを伝え聞いてたいへん喜んだというが、「ニーチェには、もしかするとこのような知らせは、自分の将来の名声の予感のように響いたかもしれない。しかしその名声をニーチェ自身は、もはや自分で体験することはなかったのである」——Ivo Frenzel——²⁵⁾、この Brandes のニーチェ講義は、ニーチェ紹介の歴史的なひとこまとして、たびたび引き合いに出される。このブランドスは、その講義においてばかりでなく、雑誌“Deutsche Rundschau”などにおいてもニーチェ紹介に努めており、初期の段階におけるニーチェ発見者のひとりに数え入れることができる。

ニーチェの名が、世間で次第に取り沙汰されるようになったのは、皮肉にも、ちょうどニーチェが精神の暗黒界をさまよっていた時期と符合している。そのあたりの事情を若干あとづけてみよう。

たとえば、新ロマン主義の小説家 Wilhelm Weigand は、ニーチェの『偶像

22) 音楽家 R. シュトラウスも同時代の青年たちと同じように、ニーチェの『ツァラトゥストラ』に深刻な影響を受けたと言われ、1896年に自ら『交響詩ツァラトゥストラはこう語った』(作品30)を作曲した。

23) Armin Arnold: Die Literatur des Expressionismus, Kohlhammer 1971, S. 63.

24) この時ニーチェは、Gersdorff に財政援助を願い出ている(1)の上掲書, Bd. III, S. 1375).

25) Ivo Frenzel: Nietzsche, Rowohlt 1966, S. 130.

殆んど持ちえないまま、50年余りの生涯を閉じている。(周知のように、ニーチェは44歳のとき発狂し、以後10年余りを生き伸びた。)

若年にしてバーゼル大学の教授職を手にしたニーチェは、古典文献学という訓詁の学に足を踏み入れたが、その処女公刊の書『音楽の精神からの悲劇の誕生』(1872)は、いかにも学術書の常規を逸脱したものであり、当然ながら、学者同僚のあいだから激しい批判と攻撃を浴びることになった¹⁹⁾。ニーチェの関心そのものが、この頃からすでに文献学という学問の枠を大きく踏み出して、次第に時代文化の考察、ひいては存在や認識というものの究極的な次元へと向けられ始めていたからであった。ニーチェは、友人エルヴィン・ローデやペーター・ガスト、マイゼンブーク、パウル・レー、ルー・ザロメなどわずかな理解者をそのつど心の友としながら、独自の思想形成へと手を伸ばした。『反時代的考察』(1873—6)、『人間的なあまりに人間的な』(1878—80)を出版した時点では、極度に健康を害していて、それまでも休みがちであったバーゼル大学の教職を1879年には辞することになる。(在職中にニーチェが講じた講義も学生間にそれほどの共感を生み出しているとは考えられない。記録されている受講者の数は、いずれの場合も殆んど10名足らずであった²⁰⁾。)その後はもっぱら、ジェノアやトリノ、シルス・マリーア、ニース、ヴェニスなどの各地を転々としながら療養生活を続け、かたわら健康の許す範囲で、執筆活動が営まれた。大学での職を辞してから、1888年にいたる約10年間は、まさに「漂泊者」²¹⁾が自らの「孤影」と対座して、詩想・省察の世界に深く沈潜した時期であったと言える。この時期には、『曙光』(1881)、『華やぐ智慧』(1882)、『ツァラトゥストラはこう語った』(1883—5)、『善悪の彼岸』(1886)、『道徳の系譜学』(1887)、『偶像の黄昏』(1888)、『アンティクリスト』(1888)、『この人を見よ』(1888)などかなり多くの著述が綴られ出版されたが、その深遠な思想表現や警世の文句は、ついにこれといった反響も呼ばないまま、1888年の暮にはニーチェの精神に錯乱の徴候があらわれ、その後ニーチェはひとり心の暗闇を彷徨する人となった。

それから後の永いニーチェ受容の歴史からみて、何と言っても最も大きな意義を持つのは、『ツァラトゥストラ』の一書である。表現主義者の多くが、こ

19) この点に関しては、Hrsg. von Karlfried Gründer: Der Streit um Nietzsches „Geburt der Tragödie“, Georg Olms 1969 に詳しい。

20) 1)の上掲書, Bd. III, S. 1362-9.

21) 因みに、『人間的なあまりに人間的な』の第2巻第2部には、「漂泊者とその影」という表題が付されている。

に及ぶ資料を提供しようとする最初の試みである」¹⁷⁾と書いて、それとなく自信と自讃のニュアンスをのぞかせているのも、ある意味で当然のことかもしれない。(付言すれば、この書はあくまでテキスト集であって、ニーチェの影響史そのものを究明した著述ではない。さらに言えることは、ここにはすべてのニーチェ言及が網羅されているわけではなく、収録されてしかるべきはずのものが欠落している場合も散見されるようだ。)この書の出版を契機に、ニーチェの影響史に関する論議がより綿密な考察へと導かれるかどうか、今後の問題として大いに注目されていまいらう。

以上のような事情を念頭に置きながら、本稿では、1900年前後におけるニーチェ受容の周辺を追い、そのかたわら、表現主義文学にとってのニーチェの存在意義や、ニーチェ受容の背景などについて、及ぶ限り触れてゆくことにしたい。なお、このような問題設定は元来いささか大きすぎるテーマであり、従ってテーマの全容が今回限りで全うされるものでないことはむろんである。表現主義の文学者たちの作品中に、どのようなかたちでニーチェの投影が認められるか、このあとさらに箇々の文学に照らして観察してゆく予定である。序いであるながら、稿者は先に本誌『文芸と思想』第41号および第42号において、表現主義の先駆者 R. J. ゾルゲの文学におけるニーチェ受容のあとを辿った。また、『かいろす』第16号掲載の拙稿「シュテルンハイムの“Tabula rasa”——〈固有のニュアンス〉に関して——」もまた、表現主義とニーチェとの関係をみるための一段階として書かれたものである。同誌第9/10号および第12号におけるザイドラー論文の拙訳「R. ムーシルにおけるニーチェ像(上・下)¹⁸⁾」とともに、御参照いただければ幸いである。

2

表現主義の文学者たちが、ニーチェの著作に接し始めた時期は、後述するように、およそ1900年頃とみなすことができるが、そのことに触れるまえにまずごく初期の頃におけるニーチェ受容について少しく垣間見ておく必要があるだろう。

そもそもフリードリヒ・ニーチェは、その存命中は殆んど正当な評価を得ていたとは言いがたい。それどころか、世間の反響を自ら確認するような経験も

17) Hrsg. von Bruno Hillebrand: Nietzsche und die deutsche Literatur (dtv, WR 4333), Bd. 1: Texte zur Nietzsche-Rezeption 1873-1963, S. XI.

18) Duden-Aussprachewörterbuch (1962)には [ˈmusɪl] の発音記号が記載されていたが、新版(1974)のそれには [ˈmuːzɪl] とあるので、翻訳の際に「ムシル」とした表記を、ここでは「ムーシル」と改めた。

名が、ここには取り挙げられていないからである。彼らとニーチェとの関係については、今までのところ、有効な研究が見当たらないからにはほかならない¹³⁾。困みに、ここに挙げられている著述家たちは、広い意味で表現主義文学とは深い関係を保った文学者たちである。

ちょうどその Pütz の言葉を引継ぐような格好で、Günter Martens は、最近の論文〈精神的覚醒をめざして—表現主義におけるニーチェの影響—〉(1974 および1978)¹⁴⁾ のなかにおいて、そのことを今一度裏付ける見解を示した。「Peter Pütz の指摘するように表現主義に対するニーチェの影響を扱った研究の乏しさについては、基本的にはこんにちにおいてもいささかも事情は変わっていない¹⁵⁾。Martens は、ニーチェの影響史研究に課せられた当面の課題として、(1)著述家ニーチェの魅力の要因は何か、(2)ニーチェの思想・言語はいったいどのような結果を引き出すことになったか、(3)ニーチェの作品が極めて強く求められる背景となった歴史的状況はどのようなものであったか、などの点を挙げているが、そのあとに続けて、「しかしながら、現在のところニーチェ研究は、——少なくとも表現主義におけるニーチェ受容という分野においては——これらの諸問題に回答を提出するには、まだほど遠いところに位置している¹⁶⁾ と、あえて断を下している。

ところで、ニーチェ受容の究明に関する従来の不備不完についての、そのような Pütz や Martens の指摘に応えるかのように、折も折昨年(1978年) マックス・ニーマイヤー出版社から Bruno Hillebrand の編集になる『ニーチェとドイツ文学』と題する2冊本が出版された。その第1巻は、〈1873年から1963年にいたるニーチェ受容の原典集〉から成っており、またその第2巻には、〈研究成果〉という副題が添えられて、ドイツ文学に対するニーチェの影響をめぐっての、現時点における示唆的な論文9篇が掲載されている。なかでもその第1巻目に収められた、209篇に及ぶニーチェ言及の文章は、90年間のニーチェ受容の歴史を一眺のもとに鳥瞰できるという点で、かつてない有用な文献資料であり、今後の受容史研究には欠かせぬもののひとつになると思われる。編者の Bruno Hillebrand がその序文に、「文学におけるニーチェ受容の原典集は、今までのところ存在していなかった。ここに上梓された編著書は、広範囲

13) Peter Pütz: Friedrich Nietzsche (Sammlung Metzler M 62), S. 59.

14) 12)の上掲論文は、1978年出版の Hrsg. von Bruno Hillebrand: Nietzsche und die deutsche Literatur (dtv, WR 4334), Bd. 2: Forschungsergebnisse, S. 35-82 に再録されている。

15) 12)の上掲論文, S. 159.

16) ibid. S. 116.

うどシュトゥルム・ウント・ドラングにおけるルソーのような存在となった」¹⁰⁾と述べたが、この言葉はその後随所に引用され、すでに著名な言い回しとして通用している。

さて、本稿の眼目は、表現主義文学とニーチェとの接点をひとまず広く概観し、ニーチェが現代文学に及ぼしている影響の一端を辿ろうとするところにある。(表現主義概念については従来さまざまな議論があり、表現主義の時代区分その他についても多くの見解が交錯しているが、ここではそれには触れず、一般的にとられている考え方、つまり1910年代ないしは1925年位までの時代に顕著な一般的文学傾向として把えることにしたい¹¹⁾。)

表現主義とニーチェとの関係については、上に引用を示したごとく、あちこちで言及され、強調され、繰り返し指摘されている。さてところが、いざニーチェ受容の箇々の経緯や、影響の及んでいる諸作品の論究の次元となると、従来必ずしも完全に手が施されていなかったうらみがある。時代精神に絡み合わせて、ニーチェと表現主義のテーマ措定の類似性を説くものや、文体・修辞法の並行関係を指摘するものは多いが、一方、詳細にわたるニーチェ受容史の論著は今までのところ見当らない。総論としてのニーチェ受容論にはぜんぜん事欠かないにもかかわらず、ひとりひとりの文学者における影響の具体的事実については、こんにちなお不透明な部分が多分に残されている。(むしろアメリカやイタリアなどのゲルマニストによる個々の研究に見るべきものが多いことは、興味あることである¹²⁾。)

たまたま、その点に関して、『フリードリヒ・ニーチェ』(メッツラー叢書, 1967)の著者 Peter Pütz が同じ趣旨のことを表明している。Pütz はその著の最終章に〈影響〉という一章を設けて現代文学に対するニーチェの影響について素描しつつ、その一方で、次のような言葉を並べている。「この影響という一章が、いかに不完全であらざるをえないかについては、贅言を要しないであろう。A. デーブリーン, E. ユンガー, F. G. ユンガー, H. マン, O. フラーク, J. ラングベーン, 若きブレヒト (『パール』) などその他多くの著述家の

10) Walter H. Sokel: Der literarische Expressionismus, A. Langen/G. Müller 1970, S. 30.

11) この点に関しては, Hrsg. von Hans Gerd Rötzer: Begriffsbestimmung des literarischen Expressionismus (Wege der Forschung, Bd. CCCLXXX) 1976に詳しい。

12) Gunter Martens: Im Aufbruch das Ziel (in: Hrsg. von Hans Steffen: Nietzsche—Werk und Wirkungen—, Vandenhoeck & Ruprecht 1974), S. 116 参照。

学者と称される一群の詩人、戯曲家、小説家の名が (H. マンを別にして) 見当らないことは、理由はともあれ、遺憾なことと言わなければならない。いまかりに、C. シュテルンハイム、G. カイザー、A. デーブリー、E. シュタードラー、G. ベン、G. ハイム、R. J. ゾルゲといった具合に名前を並べてみただけでも⁷⁾ すぐに気が付くことは、彼らが一応に若い頃何らかのかたちでニーチェ洗礼を受けていること、そしてそのニーチェ体験がその後の文学展開において陰に陽に顕在化しているということである。ニーチェは、彼らにとってある時は「新しい芸術志向の告知者」として、またある時には克服されるべきひとつの標的として念頭に据えられたが、そのいずれの場合にも、ニーチェの思想や文体や文学形象などが、多様な装いのもとに再生産されている事実を、われわれは軽く見すごすことはできないだろう。

『表現主義』(1970) の著書で知られる John Willett は、その点に関して次のように述べている。「当時ニーチェのさまざまな理念は、ヨーロッパの各地で、特に著述家や画家に対して大きな影響力を振った。(中略) ニーチェによる生命の、そのディオニュソスの側面への、また無拘束な本能への、その可能性と冒険への攻撃的な肯定は、表現主義の芸術家たちの殆んどすべてを、彼の呪縛のなかへと引き入れた⁸⁾。またある文学史書⁹⁾ のなかでは、それら表現主義者へのニーチェの影響について、さらに具体的な、より強調された次のような論述が展開されている。「表現主義者たちは、現代文化批判ならびにパセティックな変革願望、行動的なヴァイタリズムという点で、フリードリヒ・ニーチェの従者であった。特に、同様の傾向によって靈感を与えられた『ツァラトゥストラはこう語った』の従者であった。〈われわれの背後には、つねにニーチェがいた〉(G. ベン)。世界はただ美的現象としてのみ、芸術的行為による虚無の克服としてのみ是認されうる、というニーチェの見解もまた、表現主義の職人風芸術の側面に影響を及ぼした。〈表現的なるもの〉一般に対して、つまり配語法や語彙選択にいたるまでニーチェの言語の持続的な影響がみられる (R. J. ゾルゲ、G. カイザー、G. ベン)」。そう言えば、W. H. Sokel はその著『文学的表現主義』(1970) のなかで、「表現主義者たちにとって、ニーチェはちょ

7) もちろんそのほかにも、A. シュトラム、F. ヴェルフエル、W. ハーゼンクレーヴァー、K. エートシュミット、J.R. ベッヒャーやその他多くの、表現主義に関係した文学者たちについても、ニーチェとの関係からの言及が可能であろう。

8) John Willett: Expressionism (World University Library) 1970, S. 21, 片岡啓治訳『表現主義』(平凡社, 1972), 41頁。

9) H. A. und E. Frenzel: Daten deutscher Dichtung, Chronologischer Abriß der deutschen Literaturgeschichte (dtv 3102) 1972, Bd. II, S. 535.

ストリンドベルイ (スウェーデン); K. ハムスン (ノルウェー) などの名を列記した。

これら諸人物たちにおけるニーチェとの関わり合いについては、むしろそれぞれに深浅の度合も異なるし、同じ次元でニーチェの影響を云々することはとうてい不可能である。それはともかく、しかし、これら多くの文人・思想家・心理学者たちが、ニーチェの思想圏のうちから少なからぬモメントを自己の思弁のうちに摂取していった事実は、恐らく覆うべくもないと思われる。「彼らがニーチェという現象をいかに議論したか、そのありようを検討することは、いずれの場合をとっても現代の思想史のある重要な一点について、大いに理解を深めることになるであろう」³⁾、Seidler はそうも述べている。

殊に、文学という側面に及んでいるニーチェの直接的・間接的な影響は、ある意味で今世紀文学一般の基底に連なるものであり、ニーチェにみられる「同時代の状況との対決」や「生の力に対する多幸症的な讚美」⁴⁾は、後に続く世代の文学者たちにとって、意味深い啓示となった。「価値転換」の時代の局面に逸早く目を配り、混迷した文化状況の背後に「ニヒリズム」の様相を読みとり、またそれゆえに「地上的実在」のありように深く想いをいたしたニーチェの姿は、そのまま現代の文学者たちにとっての“Leitstern” (導きの星) になるべく運命づけられていた。

かつて Paul Böckmann は〈現代文学の状況に対するニーチェの意義〉(1953) と題する論考において、現代文学に浸透しているニーチェの影響についての、ひとつの総括的な見解を示したことがある。論者はそのなかで、「1880年代の自然主義以後の文学生活に対するニーチェの影響は、どんなに高く評価しようと、評価しすぎることはありえない」⁵⁾ と述べ、その密接な関わり合いについて示唆的にかつ具体的に論述した。Böckmann の言葉に俟つまでもなく、現代文学とニーチェとの結びつきは、普通に考えられる以上に底が深い。箇々にわたる直接的な影響とはみなしがたい場合でも、「その著述の関わり知らぬところにおいてさえ、ある影響が認められる」⁶⁾ 事例も、決して稀ではないからである。

それにしても、Seidler が記した列挙のなかに、いわゆる「表現主義」の文

3) *ibid.* S. 329.

4) Gunter Martens: *Vitalismus und Expressionismus*, Kohlhammer 1971, S. 54.

5) Paul Böckmann: *Die Bedeutung Nietzsches für die Situation der modernen Literatur* (in: *Deutsche Vierteljahrsschrift*, 27. Jahrg. 1953), S. 78.

6) Peter Uwe Hohendahl: *Das Bild der bürgerlichen Welt im expressionistischen Drama*, Carl Winter 1967, S. 155.

表現主義におけるニーチェ受容 (I)

—序 説—

恒 吉 良 隆

1

フリードリヒ・ニーチェ (1844—1900) の死後すでに80年が経過しようとしている。その間ニーチェが今世紀の精神界に投げかけた波紋の大きさについては、恐らく計り知れないものがあるだろう。ゴットフリート・ベンの言うように、いわばニーチェは「時代の地震」(das Erdbeben der Erde) となって、世紀転換期における思想・文学・科学などの領域にさまざまな衝撃を加えた。われわれはその衝撃の跡を、単にドイツのみに限らずヨーロッパ各地やその他の国々においても広く確認することができる。ある時ニーチェは、ゲーテのことを称して「ヨーロッパ的事件」と呼んだことがあったが¹⁾、その意味ではニーチェ自らもまた、20世紀初頭における“ein europäisches Ereignis”になったと言っても過言ではないだろう。(わが国においても、まず明治20年代後半にニーチェ受容が果され、その後この詩人哲学者のイデー・言論は文芸や思想、精神科学などの分野に濃淡さまざまな影を落している。)

ところで、ある箇所²⁾ Ingo Seidler は、ニーチェの影響下に置かれた著述家たちの名を具体的に列挙して、ドイツ語圏のなかから、M. ハイデガー、K. ヤスパーズ、O. シュペングラー、L. クラーゲス、A. アードラー、S. フロイト、St. ゲオルゲ、R. M. リルケ、P. エルンスト、F. G. ユンガー、R. ムージル、H. マン、Th. マンの名前を挙げ、さらにそれ以外の国からは、A. ジッド、P. ヴァレリー、A. カミュ、A. マルロー、H.d. モンテルラン (仏); G. ジェンティーレ、G. ダヌンツィオ (伊); J. オルテガ・イ・ガセー、M.d. ウナムーノ (スペイン); J.L. ボルヘス (アルゼンチン); G. サンタヤナ、H. L. メンケン、E. オニール (米); G.B. ショー、D. H. ロレンス (英); J.A.

1) Hrsg. von Karl Schlechta: Friedrich Nietzsche. Werke in drei Bänden, C. Hanser 1960, Bd. II, S. 1024.

2) Ingo Seidler: Das Nietzschebild Robert Musils (in: Deutsche Vierteljahrschrift, 39. Jahrg. 1965), S. 329.